

第一回 慰問コンサートと炊き出し実施してきました

6月23,24日、宮城県南三陸町、東松島市への慰問コンサートと炊き出し支援は参加者10人で実施されました。東京アイヌ教会・カムイミントラは千葉県木更津市から5人、ユーラシアンクラブ・愛川サライ、イーグル・アフガン復興協会からは5人が新宿駅西口にあった集合の後出発し東北道蓮田サービスエリアで合流の後、宮城県仙台南に向けスタートしました。

支援活動に当たっては、多くの方から食材、調理具、調味料、交通費等へのカンパをいただき、軽トラやバンを用意して万全の準備で臨みました。当日思いがけない事故等で参加を取りやめる人もいましたが、あいにくの雨の中、先を急ぎ、受け入れ先となる被災地の調整と案内に当たってくれた宮城県大河原町えぞこホールの水戸所長、玉淵職員と連絡を取り合いながら11時過ぎ仙台南で合流できました。

その後、南三陸町を訪問。町全体を飲み込んだ津波被害の現状を目の当たりにしながら山間に丘の上の被災地を目指しました。プロ野球やサッカーチームのキャンプ地でもあった山間に設置された住宅、体育館に生活する皆さんに挨拶し、現状についてお話を伺った後、被災者と活動参加者が協力していすを並べ、即席の演奏会場を設営。橋本岳人山による演奏がスタート。尺八界最高峰の音楽を紹介、心からの拍手が湧きました。岳人山は、自らが肺気腫で再起不能と医師から宣告されながら、家族との絆で奇跡が起きて左肺が再生し、医師を驚愕させて今日に至ったことを紹介しながら、希望を捨てず一緒にがんばりましょうと語りました。

岳人山は、実は学生時代に海洋学研究に携わり、実習で三陸町の津波調査をしていました。地元には「浜に家を建てるべからず」と家訓を守る家があり、津波被災の恐ろしさを伝える伝説があり、岳人山の恩師も学界で警鐘を鳴らし続けていた人でした。記憶する南三陸町一体の海岸を視察した岳人山は、青年の時、牛乳を8円で買ったお店も含め、全て変わり果てた瓦礫の町に、思い去来交錯するところが大いにあったようです。私は、「2011年3月11日 絆」と題した曲づくりを依頼し、岳人山は了承しました。皆で演奏し、アジア最高峰のミュージシャンが即興で演奏できる、津波の現状と、慰霊、残された町の人々の希望や力につながる曲を強く要望しました。構想がまとまれば7月中旬に、8月12日に参加するミュージシャンとさらに曲づくりに取り組む計画です。

南三陸町の後、被災の状況を視察しながら東松島市小野文化センターに移動しました。到着したのは夕方、公民館の調理室で早速食材の仕込みにかかりました。江藤セデカさん、イーグル・アフガン復興協会会員ノビリタ・マヤさん、成宮勇さん、橋本岳人山さんらの協力で大量の玉葱、ジャガイモ、ニンジン、キュウリ、を刻み涙を流しながら、胴鍋で400人分の煮込みたれを調理し、鶏肉を香辛料で炒めると、交代で生活支援に当たるスタッフさんや子どもたちがカレーの匂いに「おいしそう」と声をかけてきました。夜十時には仕込みを終え、朝4時からの活動を終えて就寝。翌朝早朝から、味を調え、60キロのご飯を炊き上げました。成宮さんは野菜不足の被災者のために大量のキャベツをみじん切りにして用意しました。一方浦川治造さんも北海道産の昆布と鹿肉、大量の野菜を煮込んで「エゾ鹿オハウ(汁)」を準備、胴鍋二本を完成。文化センターは、町内スピーカーで12時からアイヌ料理の炊き出しがありますと広報したこともあり、12時前から人の列ができ、急ぎテントに料理を運び、炊き出しがスタート。「2人分」「5人分」「6人分」と家族の数だけ注文が続き、1時間半で鍋はきれいになくなりました。岳人山は、炊き出しに訪れた皆さんに演奏を披露し拍手を浴びました。食べた人からおいしかったと声をかけられたり、キャベツを大量に持ち帰る人もあり、野菜一杯の料理が喜ばれたなど感じました。

今回はまったく初めての炊き出しで、分量、味付けそして段取りと戸惑いながらの活動でしたが、今回の試みで一つの目安がわかりました。8月12日のチャリティコンサートを成功させ、大河原町えぞこホールと現地の文化施設職員の協力を得て、秋以降の慰問音楽キャラバンと炊き出し活動を継続していきたいと思えます。私たちの活動は、太平洋岸にそって500キロにわたって広がる被災地への支援としては、点にもならないささやかなものですが、できれば、支援の及ぶにくい状況にある被災者への援助を心がけたいと思えます。今後とも皆様の変わらぬ援助をお願いします。写真等を含めた活動報告は改めてお知らせいたします。

NPO ユーラシアンクラブ・愛川サライ 理事長 大野 遼(文責)
東京アイヌ協会 名誉会長 浦川 治造 (カムイミントラ代表)
イーグル・アフガン復興協会 理事長 江藤 セデカ